

『物語と歴史の文化学Ⅱ』

LIBRARY ICHIKO 153 WINTER 2022 1月31日 発売予定

物語・小説を「フィクション/虚構」だと見なすことに異議を唱えたポール・ド・マンにしたがって、哲学も社会科学もフィクションでしかないと、反語的に言ってみると、物語の方が哲学などよりもはるかに物事の本質とさらに歴史性を表現していることに巡りあっている。ジャック・ブーアレスは、哲学者にならなかつたムーゼルがいかに哲学的であるかを論じ、またエドワード・アンドリュースはシェイクスピアやブルーストにコンシアンスの系譜を経済史に照応させて明証にした。意識より根源の西欧的次元の対象化である。

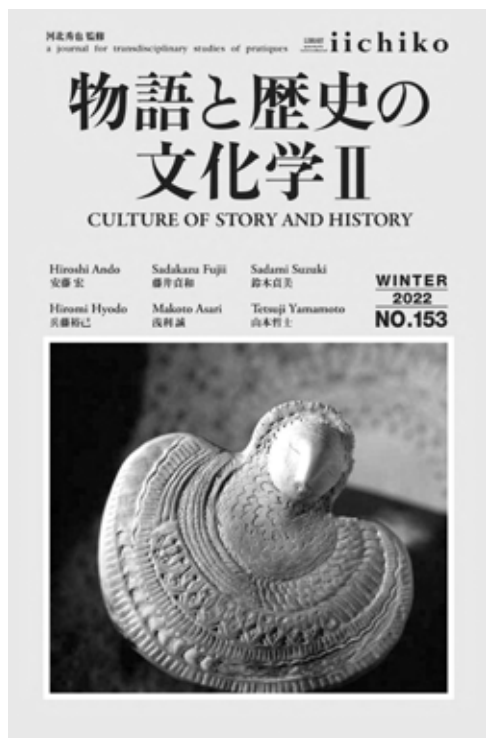
歴史への粗野な唯物史観的な還元は、はるかとおに超克されている理論転回が、日本では曖昧なまま誤認だらけの邦訳言語によって概念空間化されてしまっている。その土壌にのって文学理論やナラトロジーのごちゃ混ぜ概念世界が大学言説に浸透している。

文学と哲学の間にぼっかりと開いている「空」を、かなり高度に考察しながら、言説転移と言説生産を凶らねばならない。その素材が、日本文学/物語総体にある。そこへ切り込んでいく「物語と歴史」のテーマ(戦略)は、同時に言語理論の配置換えをもたせてなされる必要がある。今回の特集は、一気にそこへ飛躍した高度な考証界となっている。いまわたしたちは、西欧の普遍性に代わりうる日本言説からの世界的な普遍性へと立ち向かっている。述語制言説体系が不在のままの次元を脱しようとして、近代言説のみならず近代批判言説への批判考察をもへながら、論理実証主義や数字至上主義の稚拙な思考から手を切っていく途上で、言語化されていない言語空間をうき立たせようとしているのだ。主体は言語の効果ではあるが、認識次元のものではないし、主体自身に属するものでもない、欠如/空の場所を占める外、存在のsisterである。言表行為 enunciation は、書かれることができない表出であるのだが、(signification) は言表行為によって聞きとれる(ジャック・アラ・ン・ミレルより)。それは、「言葉と物」ではなく、「感覚と物」のヘーゲル「精神現象学」世界からの脱却であり、想像表出が現実界と結ぶ心的表出を含んだ情緒資本世界への知的資本形成の場所となつていこう。吉本「心的現象論・本論」(知の新書)はその地盤を切開し、象徴界などはないと喝破した友人モーリス・ゴドリエの大胆さの限界が、物語・神話・文学の大海にある。友人ロジェ・シャルチエは社会の文化史をもって「社会史」の限界を突つ切つたとき、ヘーゲル歴史学を批判紹介していた。

文学少年であつたわたしは、詩を書きながらも歪んだ世界を的確に把握する「社会科学と哲学」の領園に遠回りしながら、世界の一線の論者たちと本誌を通じて交通しながら、かつての日本文学によって培われた情緒資本の自己技術の確かさを、知的資本の生産へと向かいながら、本誌30数年のうちこんなできたことの総括を「通道」へとなそうとしている。日本の文化資本総体の遺産はたいへんなへものであることの実際は、日本回帰ではない、普遍と本質への探究である。始まりは続く。

▼安藤宏「あひびき」の系譜 ▼藤井貞和「漢字かな交じり文、神経心理学、近代詩」 ▼鼎談 鈴木貞美×兵藤裕己×山本哲士「日本語」文学から日本文化の普遍を考える(2) ▼鈴木貞美「なぜ日本におけるナラトロジーが必要か(1)野家啓一『物語の哲学』第1章を脱構築する」 ▼浅利誠「述語制言語の日本語とコブラ【連載5】」 ▼カラー特集「馬の住む御崎」

【LIBRARY ICHIKO】は季刊誌です。次号は二〇二二年四月末発行予定



【監修・アートディレクター】
河北秀也(かわきた ひでや)
1947年生まれ。日本ペリエールアートセンター主宰。著書に『デザイン原論』など。
本誌プロデューサー、アート・ディレクター。

【編集・ディレクター】
山本哲士(やまもと てつじ)
1948年生まれ。
政治社会学、ホスピタリティ環境学。
主な著書に、『ミシェル・フーコーの思考体系』、『ホスピタリティ講義』、『国つ神論』、『くもの日本心性』、『高倉健・藤純子の任侠映画と日本情念』、『フーコー国家論』ほか多数。

ご注文は「RCC」→ Fax. 03-3294-2177

文化科学高等研究院出版局 tel.03-3580-7784 fax.03-5730-6084

物語と歴史の文化学Ⅱ

LIBRARY ICHIKO 153 WINTER 2022 1950円(税込)

ISBN 978-4-910131-24-5 C1010 ¥1500円

書店名

部数